ドイツから日本の伝統文化を思う

シニア派遣　教諭　藤本　浩行
（令和３年度派遣　ドイツ　デュッセルドルフ日本人学校）

１．４つの節目の年に立ち合い、新たなスタート

「他国文化にふれることは、自国文化の見直しにつながる」

この言葉は、昭和の終わりに国際理解教育の研究指定校に勤務していた時に、ご自身が在外教育施設で勤務経験のある指導者のＮ氏から聞き、心に響き続けている言葉です。教職人生のいつの日か在外教育施設で教鞭を執ることが夢でした。

第１の節目は還暦にシニア派遣教員として、夢を実現することができました。デュッセルドルフ日本人学校の中学部で地理、歴史、公民の授業を担当することに加え、小学部で書写も教えることになりました。今まで、小学校の実践経験しかないものの、小中連携教育やコミュニティ・スクールを推進してきた私にとっては、中学校での実践ができるので期待が膨らみました。

第２の節目は、赴任した年が日独友好１６０周年という記念すべき年でした。１６０年前といえば、日本がアメリカを始め諸外国と結んだ通商条約をドイツ（当時はプロイセン）とも結んでいたのです。歴史の教科書をていねいに読んでいくと、日本とドイツの関係がかなり記載されていました。

日本デーのしの笛、太鼓の演奏

第３の節目は、赴任したデュッセルドルフ日本人学校が開校５０周年の記念すべき年であったことです。数年前から式典に向けた準備が進められて、赴任した私たちもそれぞれの部会に分かれ、今までの資料や写真などを調べながら記念式典に向けての作業をしてきました。開校当時は、現地校の教室を間借りしてのスタートであったということです。当時のことを調べる中で、今までデュッセルドルフ日本人学校に携わってこられた方々の熱い思いが伝わってきました。

第４の節目は、デュッセルドルフ日本人学校と交流している現地のツッーリエン・ギムナジウムとの姉妹校提携４０周年という記念すべき年であったということです。海外での日本人学校が現地の人々に受け入れられるには、現地の学校との交流が欠かせません。デュッセルドルフ日本人学校が開校当初から、様々なかたちで現地校との交流を模索し、姉妹校としての強い絆で交流を続けてきたのは、諸先輩方の並々ならぬ努力の結晶であったことで頭の下がる思いです。

私は、今までの教職人生の中で、「地域は大きな学校」というテーマを掲げ、教材や人材を地域に求め、本物の教育を模索してきました。現地校との交流ができることは、今まで実践してきたことが、海外での日本人学校でも通用することを示す絶好の機会でもあり、夢が広がってきました。

実際にコロナ禍の中でも、オンラインでの交流や、図画工作や美術の作品交流が行われていました。先の姉妹校提携４０周年の式典は１１月２６日に実施されましたが、今までの固定概念をくつがえすようなものでした。司会進行はおらず、いきなり音楽演奏で始まり、両校の代表の子どものスピーチ、両校の校長が登壇してのコラボでのスピーチ、両校生徒の有志による「Cup Song」の発表などがありました。コロナ禍であったので、チョコレートで乾杯などの粋な計らいもありました。最後は、参加者と共に、折り紙で鶴や船などを折って、それらを美術担当の教員が玄関の壁面にアート作品として仕上げるというものでした。約２時間の記念式典でしたが、まるで芸術作品にふれているようなものでした。

Ce 校姉妹校提携４０周年式典で「Cup Song」披露

このような充実した現地校との交流式典を行うことができたのも、歴代日本人学校教職員の努力の賜物であると本当に感謝しています。

以上の４つの節目に立ち会えることができた幸運により、今後デュッセルドルフ日本人学校でどのような教育実践を進めていけばよいのか考えるきっかけとなり、私自身のシニア教員としての新たな第一歩となったものでした。

２．ドイツ科と社会科公民とのコラボ授業

ドイツ語科のＦ先生より、「ドイツ連邦議会の見学に向けて、ドイツ理解教育の学習を一緒にしませんか」というお誘いがありました。中学部３年の公民科で政治の学習を予定していたことや、タイムリーにも、日本とドイツでも国政選挙があったのでまたとないものでした。テーマを「ドイツ州議会の見学に行こう」として、ドイツ語科と社会科のコラボ授業を行うことになりました。ドイツ連邦共和国は、ナチス政権のような時代を二度と到来させないために各州で独立した政策が採用されていることがわかりました。義務教育の修業年限も州によって違っていることや、ドイツの選挙制度、政党の歴史的な成立を日本と比べながら学ぶことができました。

中学部３年生による州議会の見学

当初は、新型コロナ感染防止からオンラインでの見学でしたが、感染者が減少傾向になったこともあり、実際にノルトライン=ヴェストファーレ州の州議会を見学することができました。

見学の翌日に新首相が指名されるということで、予定されていた議場に降りることはできませんでしたが、観覧席で、生徒全員が議員になったつもりで、事前に課題としていた「デュッセルドルフの生活をよりよくする政策案」を発表することができました。

生徒たちが発表した課題の一部は、以下のようなものでした。「ドイツの街灯は、暗くて

夜に塾から帰宅するときは危ない」「道端にビールのガラス瓶がよく落ちているので危ない」「公衆トイレの数が少ない。しかもお金がいるので無料にしてほしい」「ドイツの自然災害への対策が必要」（実際、夏に５０年に一度という自然災害が起きたということを受けての提案でした）

これらの提案は、単元のまとめのパフォーマンス課題としてレポートを作成させました。州議会の見学でお世話になった方にも、ドイツ語の担当の教員が生徒たちの作品を訳してくださり、お礼として届けました。

ドイツの選挙投票率が日本と比べてかなり高いこと、特に若者の投票率が高いことの理由を様々な観点から追求していく契機となりました。

３．美術科と社会科公民とのコラボ授業

美術科のＫ先生から「『オモシロガラ』という作品展が開催されるので、デュッセルドルフ日本人学校の卒業生でもあるM氏からのお話を聞きませんか」というお誘いがありました。聞きなれない「オモシロガラ」ということを質問してみると、着物の柄にも時代相を反映したものであるということがわかり、今までも教材開発をしてきた私にとって、興味深いことから二つ返事で引き受けることにしました。

コロナ禍でもあり、実際に生徒たちを美術館に引率しての美術鑑賞をすることはできませんでしたが、出前授業をしていただくことになりました。

M氏による「オモシロガラ」の出前授業

こちらの方も、指導計画を鑑み、美術科と社会科でコラボの授業をすることになりました。美術科は、作品の鑑賞、社会科は公民で最終単元に「国際平和」の学習があったので、教科書の指導計画に沿って授業を行うことになり、全職員に授業公開をしました。

１２月の半ばには、中学部３年生は受験のため大半の生徒たちが帰国することになります。本校の卒業生であるM氏のお話を通して、今後の生き方についてのヒントとなるキャリア教育を視野に入れたものです。写真にある浴衣は、「オモシロガラ」の意味を浴衣の柄から理解してもらうために、授業の導入で浴衣の実物から導入したものです。９月１４日にアーヘンで国際騎馬大会が開催され、「ＴＯＫＹＯオリンピック２０２０」に協賛したものでした。開会式のレセプションで、デュッセルドルフ日本人学校の有志で「東京音頭」を踊ったときにいただいた浴衣を活用しました。

「オモシロガラ」というものは、時代相を表したもので、戦争中は着物の柄までも戦争に関するものが扱われているものです。社会科の教材開発をしてきた私にとっては、ドイツでこのような教材に出合うことができ、感激しました。また、「キュレーター」という仕事は、どのように、美術作品を展示して鑑賞してもらうのかということを具体的に理解することができました。実際に、本校の卒業生であるM氏から、キャリア教育の視点で授業を進めることができ、ドイツの芸術のレベルの高さを実感しました。

４.「他国文化を理解することは、自国文化の理解に他ならない」

ドイツに来た当初、自宅にテレビがなかったので現地採用の音楽科のＨ先生が鑑賞ＣＤを貸してくださいました。聞き覚えのあるメロディーがあり、Ｈ先生に尋ねてみると、日本での「こぎつねこんこん」「夜汽車」でした。かなりのドイツの音楽が日本に入っていることがわかりました。お菓子や医療の言葉も多く、ドイツと日本との結びつきは強いものです。

派遣されて、もうすぐ１０ケ月が終わろうとしています。新型コロナ感染により、オンラインによる授業に始まり、感染防止をした上で分散登校となりました。様々な学校行事の制約はあるものの、対面授業を行うことができることはありがたいことです。

現地学校「オープンスクール」で折り紙での交流

私の授業、「身近なものに教材を求め、興味関心をもたせ、子どもに追究させていく授業」です。

そのためには、一人一人の生徒の興味関心をとらえることにアンテナを張り巡らせ、その変容を認め励ますことです。何よりも教師自身が学び続け、子どもの興味関心を引き出す課題を提示することを常に求めています。

休日には、自転車や鉄道で、ドイツの街を散策しています。ちなみに、ドイツの鉄道ではお金を少し支払うと自転車を積み込むことができます。頭の中は、「どうしたら、目の前の日本人学校の子どもたちに楽しく充実した授業ができるか」ということを常に考えています。私にできることは、今担当している授業を充実していくことであると自分自身に言い聞かせています。

さらに、言及したいのは小学部で２年、３年、５年生に書写を教えていることです。「今月の素読」として、郷土出身の「金子みすゞ」「まど・みちを」などの詩を学年の発達段階に合わせて、季節感のある詩を選び紹介しています。特に５年生の担任が賛同してくださり、英語やドイツ語でも読ませたいということで、担当の先生方に訳していただいて、子どもたちに紹介しています。

現地学校「オープンスクール」で習字を通した交流

デュッセルドルフ日本人学校の近くには、世界的に有名な詩人である「ハインリッヒ・ハイネ」の生誕の地でもあることから彼の詩を読んでみたくなりました。夏休みにライン川下りに行ったとき、船から「ローレライ」の曲が流れてきました。これの詩もハイネの作詞であることがわかり、関心をもつようになりました。

ドイツの生活や文化にふれればふれるほど、日本文化にも関心が向き、双方の学びが深まっています。今後も、身のまわりのものに目を向けて、それを切り口に授業を展開していこうと思っています。

５．現地での日本人にインタビュー

日本でも、米作りに携わっている私にとって「豪州（？）で、アルプスの新鮮な水を使って作っているお米」「ドイツの小麦を使って作っている日本そば」などと聞くと、実際に現地に行って、携わっている方にいろいろなことを聞いてみたくなります。

先日、ドイツ在住のある日本人の方から、「ドイツに来て、どんなことが変わりましたか」という質問に、「ドイツ文化へふれることによって、日本の伝統文化をさらに深く学ぶことができるようになりました」と答えました。

実際に、日独友好１６０周年を記念して、デュッセルドルフで上映された「滝廉太郎物語」「森鴎外の舞姫」などを視聴したことがきっかけで、ゆかりのある地を訪れたり、先人の曲や書籍を入手して読んだりするようになりました。

公園にある卓球台で現地の人たちとの交流

ここデュッセルドルフは、ヨーロッパ最大の日本人のコミュニティーがあると言われています。先人たちが、この地で脈々と、現地の文化の中に溶け込みながら生活している賜物に他なりません。とは言っても、周りはドイツ人を始め、多様な人々が暮らしていますので受け入れられるのは、相当な努力があったに違いありません。これに甘んじることなく、積極的にドイツ社会に飛び込んでいこうと思っています。

最後になりますが、帯同者の妻は「デュッセルドルフからこんにちは」という誰に出すあてもない通信が１００号を超えています。私はと言えば、ノートにメモ書きで、知り合いに写真を送る程度でした。駄文ですが、貴研究会からの原稿依頼で、ドイツでの生活を見直す機会を与えていただきましたことに感謝しています。

拙稿がシニア派遣教員として、今後の派遣を考えられている方への参考になれば幸せです。私の最大の関心事は、地域です。日本人コミュニティーとして、現地でどのように機能しているのか、知りたくてドイツの地に在住されている日本人を訪ねては、インタビューをしています。異国の地で、ドイツ文化を受け入れながらたくましく生きる日本人に出会えると、私自身も元気が出てきます。不思議なことに、国籍に関係なく人との出会いの輪が次々に広がっていき、有難く思っています。

派遣されてすぐに学校の近くの教会で、「日本語でミサが行われています。関心のある方は、どうぞ」というポスターを見つけました。そこで、日本で宣教師をされているＨ牧師に出会い、「ドイツ文化はキリスト教と関係があるので、よかったら参加してください」という言葉に甘え、参加させていただいています。そこに集っている方との人間関係が広がっています。この他、デュッセルドルフでは、「日本クラブ」があり、現地旅行、音楽鑑賞、サークル活動などが行われていることは、誠にありがたいことです。このように、それぞれの赴任された地では、多かれ少なかれ地域の核になる組織があると思います。これらを上手に活用して、現地の文化にふれあっていきたいものです。